様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際純粋・応用生物物理学連合
	英	International Union for Pure and Applied Biophysics (略称 IUPAB)
	団体 HP (URL)	http://iupab.org (日本学術会議が加盟していることの記載 ☒ 有 ☐ 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		2015 年度は、IUPAB の最大行事である 3 年おきの IUPAB congress year の端境期であるため、IUPAB 自体に大きな動きは無い。理事等の更新は congress と同時に行われるため、推進体制等に関しても変化は無い。本年度の IUPAB の主たる活動は、構成団体が主催・共催する生物物理関係の教育プログラムへの財政的支援となる。その他、IUPAB を構成する各団体の様々な年会やシンポジウムが開催されている。この中で日本に直接関係する活動としては、5月に中国・杭州で開催されたアジア生物物理連合 (Asian Biophysics Association; ABA) のシンポジウムが挙げられる。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について		生物物理学研究の 1 つの柱は、物理的手法をもちいた新しいバイオ分析手法の開発と、それをを用いた新しい生物学的発見である。この点を世界に発信するため、task force として Applications of biophysics を立ち上げ、これまでに実用化された生物物理学的な分析手法を紹介する資料作成を行っている。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて		<ul style="list-style-type: none"> ● 上記、Task force; Applications of biophysics は、日本生物物理学会が企画提案した。現在、日本生物物理学会自体で資料作成を進めており、既に複数の資料を web 上で公開している。 ● 2015 年度の ABA symposium では、symposium 開催を担当した中国側と ABA 会長の韓国側が symposium 運営に関して鋭く対立し、ABA 分裂の大きな危機に面した。これに対し、ABA 前会長の永山氏 (前学術会議 IUPAB 分科会委員長) をはじめとする分科会メンバーが主導的に論点の整理と対策を提案し、ABA 存続の道筋をつけた。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて		<ul style="list-style-type: none"> ● 生物物理学におけるネットワーキング：日本の生物物理学研究の水準は、IUPAB の中でも際立っている。その成果を十分に発信・浸透させるためには、世界的な権威が集う生物物理学ネットワークの中心に位置する必要がある。また、日本の生物物理学研究の成果に基づく技術イノベーションを世界展開するためにも、IUPAB を舞台とした情報発信は非常に有効である。加えて、世界的な学術動向と技術イノベーションを探るためにも、IUPAB の定点観察は必須である。 ● IUPAB における日本のプレゼンスの確立：日本学術会議

様式第 2 (第12条関係)

	<p>から支援しされている分担金は、日本学術会議・基礎生物学委員会・応用生物学委員会合同 IUPAB 分科会が IUPAB の正式メンバーとして参画するための会費として使用している。これによって、本分科会は IUPAB の総会において3つの投票権を IUPAB 会長、理事の選出で行使している。これまで、IUPAB 会長 2 名 (江橋、永山)、IUPAB 理事 6 名 (小谷、大澤、和田、郷、永山、野地) を輩出するなど、日本は IUPAB の運営の中枢を担っており、常に一定以上のプレゼンスを確保している。これは、世界の生物物理学分野における日本の評価を高めることにつながっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 日本発の技術の発信：IUPAB では生物物理学の啓蒙を目的とした task force に加え、生物物理学が生み出した技術を内外に発信することで、その貢献度の認知を広げることを目的とした task force, ‘Applications of biophysics’ を進めている。この task force は IUPAB の元会長の永山國昭博士が立案したものである。これを推進するため、日本学術会議 IUPAB 分科会および日本生物物理学会のメンバーが中心となって「日本発の生物物理学技術の実用化例」をまとめたレポートを作成している (参考資料 1)。これは、世界に対する日本企業が実用化した生物物理技術情報の発信につながっており、生物物理学分野における産学連携の後押しとなっている。
<p>その他 (若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)</p>	<p>上述の通り、congress year の端境期では、IUPAB の主たる機能は、生物物理に関する教育プログラムの財政的サポートである。本年度は、シンガポールで開催されたバイオイメーキングに関する summer school (参加国 20) のサポートがなされた。その他、10European Biophysics Congress, Dresden in Germany, VIII POSLATAM Course: “Membrane Lipids, Transporters, Channels.....and all that Crosstalk” in November at Salto, Uruguay のサポートがなされている。</p>

2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

<p>総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)</p>	<p>昨年開催された IUPAB congress では、日本生物物理学会は 2020 年の誘致イベントを大々的に行った。IUPAB 理事会での投票では惜しくも次点であった。2017 年の次期 IUPAB congress でも 2023 年 IUPAB congress の誘致活動を行う予定である。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定について</p>	<p>現在、日本生物物理学会理事の 1 名 (野地博行) が IUPAB でも councilor として参加している。2017 年に予定されている改選選挙でも日本生物物理学会より一名立候補する予定である。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて</p>	<p>上述した IUPAB task force, Application of biophysics では、生物物理研究の実用化事例の資料作成とその web 公開事業を日本生物物理学会が先導して実施している。</p>

様式第2 (第12条関係)

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第11条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去5年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	IUPAB 総会 2014年(開催地:ブリスベン、オーストラリア) 2011年(開催地:北京、中国)		
	理事会・役員会等開催状況	IUPAB 理事会 2014年(開催地:ブリスベン、オーストラリア) 2011年(開催地:北京、中国)		
	各種委員会開催状況	IUPAB 理事長等による各国訪問等はあるが、委員会活動による会議開催は無い。通常委員会業務は、メールによる意見交換で進めている。		
	研究集会・会議等開催状況	IUPAB congress 2014年(開催地:ブリスベン、オーストラリア) 2011年(開催地:北京、中国) *次期 congress は2017年にエジンバラ, UKで開催予定		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	2014年、IUPAB 総会(ブリスベン、AU)、4人(うち代表派遣:永山國昭) 2014年、IUPAB 理事会(ブリスベン、AU)、1名(野地博行) 2014年、IUPAB congress(ブリスベン、AU)、66(口演数:8、ポスター数:40) 2011年、IUPAB 総会(北京、中国)、4人(うち代表派遣:永山國昭) 2011年、IUPAB 理事会(北京、中国)、1名(永山國昭) 2011年、IUPAB congress(北京、中国)、約100(口演数:24、ポスター数:45)			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況(過去5年)	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	IUPAB Past President	2011~2014	永山國昭	() 会員・ <u>連携</u>
	IUPAB council	2014~2017	野地博行	() 会員・ <u>連携</u>
		~		() 会員・連携
		~		() 会員・連携
		~		() 会員・連携
		~		() 会員・連携

様式第 2 (第12条関係)

出版物	<p>1 定期的 (年 1 回) 出版物名 ‘Biophysical Reviews’, Springer online journal 生物物理研究に関する総説 (http://link.springer.com/journal/12551)</p> <p>2 不定期 (年 2 回程度) 出版物名 ‘IUPAB News’, IUPAB のオンラインニュース誌</p>
<p>活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 ‘IUPAB News’, IUPAB のオンラインニュース誌 (http://iupab.org/news/newsletters/)</p>	

様式第2 (第12条関係)

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同 IUPAB 分科会
	委員長名	生物物理学分科会；難波啓一、IUPAB 分科会；野地博行
	当期の活動状況	<p>委員会開催実績</p> <ul style="list-style-type: none"> 第23期 (H26年-H29年) これまで3回 (H28年8月に4回目を開催予定) <p>学術の大型研究計画に関するマスタープラン</p> <ul style="list-style-type: none"> 「次世代統合バイオイメージング研究所の設立計画」を策定し提出 2016年3月31日 <p>日本学術会議フォーラム・シンポジウム開催実績</p> <ul style="list-style-type: none"> 公開シンポジウム「全細胞・マルチモーダル計測が拓く統合バイオサイエンス」2016年1月15日
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	<p>国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である</p> <p>☒ 1. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://iupab.org/wp/wp-content/uploads/Statutes1.pdf)</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)</p> <p>☒ 1. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (http://www.)</p>	
	<p>下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印)</p> <p>☒ ア 個々の学術の専門分野における統一のかつ世界的な組織を有するもの</p> <p>イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一のかつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	

様式第 2 (第12条関係)

10 カ国を超える各国代表会員が加入している	
① 該当する 2. 該当しない	
加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載	(56 の国と地域【拠金している加盟団体数】)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各国代表会員名／国名 ・ アメリカ国立科学アカデミー、アメリカ生物物理学会／アメリカ ・ イギリス生物物理学会／イギリス ・ イタリア学術会議／イタリア ・ インド国立科学アカデミー／インド ・ オーストラリア国立科学アカデミー／オーストラリア ・ カナダ学術会議／カナダ ・ スペイン国立科学技術委員会／スペイン ・ スウェーデン国立分子生物学委員会／スウェーデン ・ ドイツ学術会議生物物理学分科会／ドイツ ・ ブラジル生物物理学会／ブラジル ・ フランス科学アカデミー生物物理学分科会／フランス